

# 史遊会通信

No.235号  
平成26年  
10月10日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

九月講演要旨

## 戦国大名失敗の研究

瀧澤 中

### 1、武田勝頼

偉い親、有能な跡取り、豊富な人材、豊かな財源…。

企業継承で言えば、揃い過ぎの条件かもしれない。しかし、戦国時代には同じような条件がありながら、滅びていった大名家が少なくない。きょうはその中で、武田勝頼と豊臣秀頼について触れたい。

### 十月史遊会の時間変更

十月二十二日(水)の例会の時間を都合により  
午後三時から五時に変更します。

まず、武田勝頼は凡将であつたか否か？

彼が武将として、信玄存命中から活躍していたことは知られている(三方原合戦の実質的指揮官)。しかも、武田家が最大の所領を得たのは、信玄時代ではなく勝頼の時代である(およそ一三〇万石前後)。

内政面でも、「信玄堤」のような公共事業を行い、有能な大名の部類に入る。

では、勝頼の弱点は何であつたのか。

まず、出自。勝頼は諏訪頼重の娘と信玄の間に生まれた、信玄の四男である。諏訪家を継承し、武田本家から見れば、傍流にすぎない。信玄長男の謀反などが重なって勝頼が信玄の後を継ぐが、家中には不満も多かった。

例会のお知らせ

◎ 十月例会

日時 平成二十六年十月二十二日(水)

午後三時～五時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 諸橋 奏氏

テーマ 古代日本海沿岸の神々と

国宝『海部(あまべ)氏系図』

十一月号自由執筆 千坂精一、新井宏、

柴田弘武の諸氏 締切十月末

◎ 十一月例会

日時 平成二十六年十一月二十六日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

討論会 日本列島 西・東

司会 未定

十二月号自由執筆「今年感動した本」

全員(友の会員も含む)

そのためもあつてか、勝頼は正式な信玄の跡取りではなく、勝頼の子・信勝が成人するまでの「陣代」（代理）という説がある。

信玄が、家中の反発を抑える為にそうしたという。これはしかし、人事の不徹底とも言ふべき信玄の失策であろう。

また、勝頼自身の背景の問題がある。

勝頼は「諏訪四郎」を名乗っていたが、上杉家の文書には、「伊那四郎」の記述がある。勝頼は、諏訪地方全域を支配したのではなく、その勢力は高遠・箕輪領に限定されていた。

政治家にとって、背景は政治力の源泉である。勝頼の政治力は当初、きわめて小さかつたと言わざるを得ない。

武田家の正式な跡取りではなく、他方、諏訪の実質的な支配権も持たない。これでは武田家中を掌握するのに苦労がいる。

そんな中で長篠合戦が起きる。

勝頼凡将の要因として挙げられる長篠合戦。本当に勝頼の指揮は間違っていたのか。

まず、①柵を設けた程度の敵に対し、突入して蹴散らそうとするのは無謀なのか？

それは戦国時代の当時、ごく普通の戦術で、批難するにあたらぬ。

②鉄砲を軽視したために惨敗したのか？

武田家は鉄砲を重視し、鉄砲を持参する家

臣には、その分、他の兵役を軽くするなど特例を設けるほどであった。

③勝頼は功名心のために、部下の犠牲をいとわず攻勢をかけたのか？

織田・徳川連合軍は巧妙に兵を隠し、実体を小さく見せていた。勝頼から見れば、若干多い程度の敵である。ゆえに、攻勢をかけるのは無茶とは言えない。

ただし、攻勢を止めたのが穴山信君や小山田信茂ら先代からの重臣で、攻勢を支持したのが勝頼の側近らであったことから明らかのように、合戦の場に派閥争いが持ち込まれていたと見る。

勝頼は長篠敗戦のあと、北条との同盟によって小康を得るが、やがて上杉家の内紛を発端に北条と手切れになり、織田・徳川の攻勢を支えきれずに壊滅した。

武田家滅亡は、第一に経済力の問題がある。織田・徳川は、信玄時代からみて、飛躍的な経済成長を遂げており、兵員や武器の調達、調略資金は、武田家の追いつくところではなかった。

第二に、実質的な軍事支援を期待できない上杉景勝との同盟によって北条を敵に回したこと。これによって、武田家は関東と東海・中部という二正面からの攻撃にさらされた。

第三に、一門の裏切り。言い換えれば、フオロアーの無責任さである。天正十年の武田家滅亡は、一門の木曾義昌の裏切りに端を発し、一門最大勢力の穴山信君の寝返りが決定打になって、将棋倒しのように崩れ去った。本来、自らを盾とすべき一門が本家を裏切ったのである。

勝頼に問題がなかったとは言わぬが、組織に属する者は誰しも、大なり小なり組織を維持する責任がある。まして、昨日今日家臣になった国衆ならまだしも、一門はそのために優遇されているのである。

武田家滅亡はこの一門たちの責任が重く、勝頼に十分な政治力を与えずに逝った信玄の責任もまた、問われねばならぬ。

## 2、豊臣秀頼

大坂の陣の発端となった、京都・方広寺の梵鐘。いまも見学することができ、梵鐘には「国家安康」「君臣豊楽」の文字がはつきりと読み取れる。

この文言に怒った徳川が、怒濤のごとく軍勢を動員して豊臣を滅ぼすが、不思議なことに、梵鐘はそのまま今日まで残った。

徳川はなぜ、憎き梵鐘をそのまま残したのか。理由は簡単、べつに文言などどうでもよ

く、豊臣家を潰すきっかけがほしかっただけだからである。

中国がチベットを侵略した時も、「外国の帝国主義者からチベットを解放する」という謳い文句だったが、当時のチベットに外国人は数人。それも登山家や電気技師だけだった。侵略者にとって、侵略理由など何でもよいのである。

さて。偉大な父親（秀吉）と莫大な遺産がありながら、なぜ豊臣家は滅びたのか。

豊臣家の財産というのは、たとえば延暦寺横川中堂や醍醐寺三宝院、相国寺法堂、北野天満宮や大坂四天王寺など、国宝や重文に指定される多くの建造物を建立し、家臣を養い、それでもびくともしていない。大坂城落城後、黄金二万八〇六〇枚、銀二万四千枚余が焼け跡から見つかっている。

政治権力も、実は関ヶ原合戦後、徳川は豊臣家に西国支配をまかせるつもりがあったと思える（かつての関東公方のようなもの）。関ヶ原合戦後、西国には徳川譜代大名は一人も配置されていないのである。

時期別に見てみよう。

●第一期は慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦後から慶長一〇年（一六〇五）まで。

一六〇三年、家康は征夷大將軍になった。

この時点で「豊臣家代理人」から「徳川將軍」という、別の政治体制に移った。だから、一六〇五年に家康が秀忠に將軍職を譲るのは、ごく自然なことである。

●第二期は慶長十一年（一六〇六）から慶長十四年（一六〇九）まで。

一六〇六年、家康は江戸城の普請を西国の豊臣系大名らに命じるのだが、この時、監視役の奉行の中に、二名の豊臣家家臣を採用して、しかも豊臣家に普請はさせなかった。つまり豊臣を「体制側」として遇していたのである。

一六〇八年、伊達政宗や浅野、黒田、蜂須賀、前田、山内といった豊臣系大名に「松平」の姓を与えて、豊臣系を切り崩す。

一六〇九年。丹波八上の前田茂勝を改易にし、丹波八上に松平康重、丹波亀山に岡部信盛、いずれも徳川譜代大名を配置した。徳川の西国直接支配の始まりである。

●第三期は慶長十六年（一六一一）。

二条城で豊臣秀頼と徳川家康が会見した。

秀頼十九歳、家康七〇歳。

秀頼は右大臣。将来の関白は自明である。

もし家康が死ねば、状況は変わる、と、豊臣側は見えていた。

他方徳川幕府は二条城での家康・秀頼会見

の直後、全国の大名に対し、「三箇条の誓紙」を提出させ、徳川への忠誠を誓わせた。

●第四期は慶長十九年（一六一四）〜。方広寺の梵鐘事件。

豊臣家の家老と言われた片桐且元は、徳川幕府から領地を与えられた豊臣系の中小大名の一人にすぎない。

その且元が、徳川と話し合いの結果持ち帰った条件と、淀殿が、且元とは別に徳川に派遣した大蔵卿局らとの話が食い違い、且元は命を狙われる。

且元は徳川に買収されていると見られた。そう取られてもおかしくない行動（徳川の且元への厚遇）が知られていたからである。

徳川はシグナルを出し続けていた。政権を譲ることはできないが、豊臣が面子を保って生き残る道と、万が一の場合の豊臣潰しと、両方の策を講じ続けた。豊臣は、そのシグナルを活かすことができなかった。

さまざまな理由は考えられるが、豊臣が政治力の拡大に務めなかったことだけは確かである。自分が思う方向に人々を動かす力に政治力。この点、徳川と好対照をなしているといえよう。

自由原稿

## カメラは人間を超えている

三戸岡 道夫

先日、カメラマンのAさんから写真展の案内状をいただいた。

Aさんはアマチュアカメラマンであるが、二、三十年のカメラ歴を持つ、プロ級の名カメラマンである。今度は二科展の写真部で作品が入選し、その案内状であった。作品の題名は、

### 「橋下幻想」

とあり、出展した三枚のカラー写真が印刷されていた。それはお茶の水駅付近の、神田川にかかる橋の下の水面に写る風景を撮ったものであったが、どう見てもそれは川の水面に写った写真とは見えないのである。

一口に言えば、色とりどりの華麗でファンタスティックなイラスト模様、というようなものなのである。

一枚目は、水色と紺色の波の重なり合いのような中に、白いロボットのようなのが浮いている。意味は不明である。

二枚目は、水色と白の模様の横に、黒い人間の横顔のようなのが写っている。

三枚目は、紫色と白の色彩の混乱の中に、赤い唇の子供の顔のようなのが浮いている。

三枚の写真の画面を強いて説明すれば、以上のようになるが、それはとても神田川の橋の下の水面に映った、お茶の水駅付近の風景写真とは思えないのである。

そこで私はAさんに電話で聞いてみた。

我々が普通橋の上から神田川の水面を見れば、青空や白い雲を背景に、ビルの数々や川堤の緑などが投影されていて、とてもこの写真のようには見えない。

しかし川面に近寄ってよく見ると、水面には風に吹かれてさざ波がたっており、したがって水に写った風景も、そのさざ波によっていろいろな形にゆれているのである。

そして更にそこへ舟などが通ると、大きな波で水面は大きくうねり、さざ波にゆれていた風景も、さらに大きく変形し、あたかも色彩の模様のようなになるのである。そのチャンスを狙ってシャッターを切った、というのである。

しかし、そのようなチャンスはめったにあるわけではない。そのためAさんは三日間もお茶の水まで足を運び、何十回となくシャッターを切った。

しかし、それだけであのような写真が出来る

たわけではなかった。

その写真を普通に現像すれば、さざ波や大波にゆられた珍しい川面の風景が出来る。

しかしAさんはそれだけで止めずに、さらに現像を、もっと深く、もっと強く、極源まで現像したのである(それがどういふことなのか、写真に素人の私にはわからないのであるが、写真技術にはそういうことがあるのである)。

すると、それまでに現われてこなかった違う映像が、浮き上ってくるというのである。すなわち人間の眼に見える以上のものが、見えてくる、いわば映像の極源が引っぱり出され、現像されるというのである。カメラは人間に見える以上のものを、写しているのである。

それを普通感覚で現像すれば、人間が見える程度のものしか出てこないのであるが、普通以上に現像を強化、深化させていくと、その奥の画像、すなわちあのイラスト画のような写真が出来上るといふのであった。

私はふと宇宙の神秘に触れたような気がした。宇宙の神秘というより、カメラの神秘であろうか。カメラは人間の眼で見える以上のものを写しているのである。カメラの眼は人間の眼を超えているのである。

そしてこれはカメラだけではない、あらゆるIT技術の問題ではなからうか。

自由原稿

## シルクロード見聞記②

三慕史堂 中込勝則

## 玉の街ホータン（和田、昔の于闐（うてん））

ニヤのホテルで朝食を済ませた後、九時過ぎに出発しホータンに向かった。約三百キロの行程だが、ニヤの小さな街はすぐに出はずれ、あとは一面の砂漠地帯に入る。昨日の風と砂が飛ぶ砂嵐のような現象は収まって見晴らしはいいが、見わたす限り地平線の彼方まで沙漠で、目に映るものはラクダ草やタマリスクがところどころに生えているだけだ。

天山南道のチャルクリク→チャルチン

→ニヤ→ホータン→ヤルカンド→

カシュガルは、地図を見ると崑崙山脈の北麓にならぶオアシス都市だから、バスから南の方角に崑崙山脈が見えるのかと思っていたが、山らしきものは全く見えない。山脈からは、かなり離れているようだ。

しかし、沙漠のなかにも水が流れることもあるとみえて、流れが砂をけずった川の跡が見える。水が流れている所はほとんどなく、水が流れた痕跡だけがある。水の痕跡は南から北に向かって流れている。やはりタクラマ

カン砂漠は、別名タリム盆地というように北方の中心部に向かって低くなっているのだ。

崑崙山脈の雪解け水が大量に流れてくるところにオアシスが発達し、人が住める環境ができて街が形成されたのだということが景色を見ていただけで理解できる。

また、このあたりの川はいわゆる樹枝河といわれる。土地が平らで土手などはないから水は勝手に少しでも低いところに流れていく。風で砂が飛ばされればそこが低くなり、水はそこに流れるといった具合だ。だから川幅は広くなって中洲がいっぱいある。これを上空から見ると樹木の枝のように見えるところからこの名がついた。又、相当の水量がある川でないと、やがては砂に吸われたり蒸発したりして川そのものが砂漠の中で消えてしまう。

## 1、ホータンの歴史

ホータンは西域南道の重要なオアシス都市で、新疆ウイグル自治区西部においてカシュガルと並ぶ中心都市である。人口は三十五万人。尉遲（うっち）一族によってたてられた于闐（うてんこく、BC二四二〜一〇〇六）の故地で、仏教を国教として繁栄した。法顕や玄奘もここを訪れた。玄奘は、インドからの帰国ルートに西域南道を採りホータンをも訪れた。『大唐西域記』の中で、彼はホータンの印象

を、——人民は繁榮し、仏教は盛んで、白玉黒玉を産し、強風が時に細塵を吹き飛ばすこととはあるが、気候は和順で、住民は礼儀を重んじ、その気性は温和で、好んで学芸を修め、富裕で音楽歌舞を好んだ——と記している。当時は一大学芸文化都市を成していたのだ。

やがて、中央アジアにあったトルコ系のイスラム系のカラハン朝（九世紀中頃〜一二二一年）が成立して新疆ウイグル自治区の西側一帯からウズベキスタンに到る広大な地域を領有し、中央アジアのトルコ化・イスラム化に大きな役割をはたした。この政権がホータンを支配するにおよんでこの地もイスラム化した。また人口に占めるウイグル族の比率がもともと高い都市である。マルコポーロがこの街を訪れたときには既にイスラム化していた。一八九六年、スウェン・ヘーデンが初めてホータンに足を踏み入れたときには、街には七つのマドラサ（回教学校）と二十のモスク（回教寺院）、たくさんのマザール（墓）があった。

ホータンの旧祉（古い街）がどこであったかは、スタインによって現在の街に西十一キロにあるヨーカトンがそれであることも確認された。漢代から宋代にかけて人が住み、于闐国の都城跡といわれる。現在は、小高い山が残る程度で、大方は果樹園になってしまつて

いるという。

ホータンの特産品としては、昔から玉と絨毯が有名だ。とくに玉は古代から産地として知られ、ここで産した玉は中国中心部は勿論のこと、遠くヨーロッパまで運ばれた。その意味ではシルクロードは、ホータンを中心として東は長安や北京から西はヨーロッパまでの「玉の道」でもあった。

## 2、玉にまつわる歴史

ホータンの街に入って間もなく、「玉龍喀什河(ユルンカシユ河)、別名「白玉河」」にぶつかる。白玉河は崑崙山脈の雪どけ水を集めてホータン市の東をながれる川で、市街の西をながれるカラカシユ河(別名黒玉河)とホータン市の北方で合流してホータン河となり、タクラマカン沙漠の中央に流れていく。ホータンの街は、この両河のあいだに挟まれたオアシス都市だ。

ホータン河は、やがてタクラマカン沙漠の北部をながれるタリム河に流れ入る。タリム河は、タクラマカン沙漠の北部をながれてコンチェダリアに合し、かつてロブノール湖があった方向にながれていく。これらの川は内陸川で海に流れ入ることはなく、やがては沙漠のなかにその姿を歿してしまう。

「白玉河」は、夏場、崑崙山脈からの雪どけ

水の洪水があると、玉がながされてくることで古来有名だ。岩石が川をごろごろ流れてくるうちにやわらかい岩の部分は削られて、固い玉の部分だけが残るのだという。玉は崑崙山地の特産で、古来、中国人は金よりも玉を最高のものとして珍重した。

一九六八年、河南省滿城県で発見された漢代の王の墓から**金縷玉衣**(きんるぎょくい)をまとった死者が発見された。玉でつくった小札(こざね)長方形の小板)に穴をあけて、これを金縷(きんる)金(きん)の糸で綴ったものだ。この衣装は、わが国にも展覧されたことがあるから、上野の博物館などで見たことがある人も多いと思う。高位にあった死者を葬るのに最高の死装束を着せたのである。

古墓は前漢の中山王劉勝のもので、彼は由緒正しい血筋の人で、玉衣を着て葬られていた。その玉衣は二千四百九十八枚の玉板を金の糸でつなぎあわせたもので、頭のとっぺんから足のさきまでをすっぽり覆っていた。金の糸で綴った玉衣を「**金縷玉衣**」といい、銀の糸で綴られているものは「**銀縷玉衣**」という。「縷」とは糸のことだ。

おびただしい玉が使われているわけだが、専門家はこの玉は新疆で産したものだという。劉勝は前漢の武帝の庶兄にあたり、玉衣を纏

って葬られるのは、皇帝や王族などきわめて高位にあった人にかぎられる。玉は、また、死者の鼻や耳の穴などに詰められることもあるし、玉で蟬の形を作り死者の口に含ませることもあった。これは魔除けでもあり、死者の復活を祈るまじないの意味もあった。

玉は宮廷はじめ貴族が独占していた。庶民には縁があるものではない。西域で産した玉は、国家が厳重に管理した。漢代に設けられた関所は、異民族の攻撃からの防衛・出入国の管理・犯罪者の逃亡防止などのほかに、西域の玉の密輸入などを取締った。玉がむやみに流通して値段が乱れるのを防止するためである。敦煌の西にあった玉門関の名前はこれに由来する。

また、史上有名な「**和氏の璧**(かしのへき)」というのも玉のことである。『**韓非子**』にある話だが、むかし、楚の卞和(べんわ)という人が山中で立派な玉石を見つけ、これを楚の厲王(れいおう)に献上した。王がこれを鑑定人に見せたところ、「ただの石だ」という。王は怒って卞和の右足を切断する刑に処した。のちに彼は、後に王となった武王にまたそれを献上した。武王が鑑定させたところ、また「ただの石だ」となった。武王は彼を左足を切断する刑に処した。

次に文王が即位した。卞和は三日三晩泣きとおした。文王がそれを耳にしてわけを聞き、卞和の玉を磨かせたところ名玉であることがわかり、その玉石に彼の名前の一字をとって「和氏の璧」と名づけた。

時代は下って、時は戦国時代、趙の恵文王がこの「和氏の璧」を手に入れた。そのころの大国秦の昭襄王がこれを聞きつけて欲しくなり、大国の威勢をかさにきて、自国内の十五城（＝十五の街とその領域）と引き換えに、その璧を交換したいと趙に申し入れてきた。趙の朝廷内は、璧を渡さなければ秦に攻められるおそれがあり、璧を渡したところで十五城が引き渡される保証はない。賛否両論で朝廷内は沸騰した。

まず、玉を携えてこの難しい交渉に行く人がいない。そのとき、**藺相如**（りんしょうじよ）は、まだ下級役人だったが、名乗り出てその役を買って出た。彼は、秦に至って昭襄王に謁見し璧を手渡したが、昭襄王はこの璧を居並んでいる后や妃などに見せて笑いあっているばかりで、十五城の割譲のことについてはかばかしい返事をしない。そのとき藺相如は一計を案じて、「実はその璧には傷がありません。それを示して、「こらんにいれましよう」と、璧を自分の手に戻し、突如立ち上がって「大

王には、十五城を割譲するお気持ちはないとお見受けしました。それではこの璧はお渡しするわけにはまいりません。もし、大王が力づくでこれを奪おうとなさるのであれば、私はこの璧を我が頭共々、かたわらの柱に打ちつけて粉々にいたします。勿論その時はわが命もないものと覚悟しております」と、怒髪天を衝く勢いで、大音をあげて叱咤した。それをみて、昭襄王は璧を手に入れることは無理、力づくで手に入れたとあつては大国秦の王としての体面に傷がつくと悟り、その場は謝って彼の無礼を許した。そして、藺相如を厚くもてなして帰国させた。

藺相如は趙国の体面を保ち、且つ、璧も完うして趙に帰った。「完璧」とはこの故事から出た言葉である。藺相如は後に宰相になり、諸国は、彼の目の黒いうちは趙を侮ることはしなかつたという。

### 3、白玉河で玉探しをする。

玉は今でも中国人にとって最高の宝石で、質のいいものは何千万円〜何億円も取引されていくという。

現在でも、白玉河では崑崙山中から流れてきた玉が見つかることがあるという。川幅は三百mほどもあるのか。水は浅く砂は少なくて石ころがごろごろしている。およそ西域の

川は万年雪の山脈から沙漠を流れ下ってくるから細かい砂を巻き込んで茶色に濁っているのが普通だが、この白玉河だけは水がきれいに澄んでいて浅い。だから玉を見つけやすいのであろう。

我々が行った日にも、現地のたくさんの方が河川敷に出ていて、みんな下を向いて玉探しをしている。

中には、スコップで三尺ばかりふかく掘って探している人もいる。何人かが交代して掘っていて、穴はだんだん広がって畳五〜六畳敷きくらいになっている。それを覗いて「何かみつけましたか」と身振りで聞いたところ、「ダメだ」という風な仕草をした。しかし、穴の横にすわっていた一人が、ポケットから親指ほどの玉を出して見せてくれた。羊の脂が凝り固まったような色だ。玉は羊脂色の半透明なものがいいとされる。これがどのくらいの値段がつくのかは知らないが、得意そうだったのできつといい値で売れるのであろう。しかし、我々のような素人がちよつと行って探したところで玉がすぐに見つかるというほど甘いものではない。この地の人たちは毎日川に来て、それこそウの目タカの目で探しているのだ。いまや、川に流れてくるものを探すといったまどろっこしい手法ではなく資

本力にものをいわせて、崑崙山脈の山地をパワーシヨベルやブルトーザーで掘りかえして玉探しをしている人もいると聞く。

それはそうだろうと思う。このあたりの人の平均年収がどのくらいかは知らないが、最高級の玉を見つけて北京などに持っていったら売れば、生涯働いても得られないような大金が手に入るのだから血道を上げるのも無理はない。

もう一人この土地の人と思われる人が川の縁を歩いていて、両手でたくあん石くらいの石を抱えていてまわりの人に見せている。それをみると、石の一部に親指大で緑色をした部分が見える。これが玉だという。その部分だけを削り出して磨けば立派な玉になると云って得意そうだった。

最近、品質のいいものはなかなか産出されずに、産出量も少なくなってきたから値段はますます高騰しているとのことだ。ちなみにホータンとは古いチベット語で、「玉を産する地」というとのことである。ここで産した玉はカシユガルで取引される。ちなみに「カシユ」というのは「玉」、「ガル」は「市場」を意味すると、ガイドが説明してくれた。

白玉河での玉探し体験は四十分ほどで終わって、一行は、めいめいが自分の拾った石を

「これは玉だ」「いやそんなものはただの石だ」などと云いながらバスに引き上げた。

#### 4、バザール散策と玉の仲買現場

夕ぐれも迫るころ市内に入った。時刻はすでに七時を回っているのに日がまだ高く、街は退社時刻で交通が混雑している。市内のバザールを見に行ったら。夕方の買い物時刻とあって大勢の人がでて色々な買い物をしている。バザールといっても、道筋に食品や衣料などの日用品の商店が並び、その前の歩道に多くの露店が並んでいて、食品・果物類等売っている。昨日、クチャで食べたハミ瓜がうまかったもので、また買った。旅行中は街で売っているものをやたらなんでも食べると腹をこわす心配がある。とくに生ものには注意が必要だが、皮をかぶっている果物は、まず腹にあたることはない。

#### ○百年の恋人に会いたしハミ瓜と

#### 咲いて迎えよ紅タマリスク

バザールは大通りの交差点にあるが、その四ツ角のところに、男ばかりが集まって黒山の人だかりがしていた。人がいっぱいいるから中は良く見えない。近づいて覗き込んでみようかと思っただが、黒っぽいシャツやズボン

の現地の男ばかりが群がっている中に入っていくほどの勇氣はない。そのうちに輪が崩れたと思ったら、中から男が二人乗りのオートバイが出てきてどこともなく走り去った。

以下の想像は当たっていると思うが、オートバイの二人は玉の仲買人で、周りを取り囲んでいたのは河原などで玉の原石をひろった男たちだろう。仲買人に買ってもらうために群がっていたのだ。良い値で取引が成立しなければ、次の仲買人がやってくるまで待つのである。その証拠に、オートバイが行ってしまった後も、四ツ角の男たちはその場を去らず、その辺でツツ立っている。また、別の二人乗りのオートバイがやってきて、再び輪ができた。また取引が始まるのだ。

こうして、玉は仲買人からカシユガルなど中間のもとと大きい市場に運ばれ、やがては北京などに運ばれていくのである。(つづく)

元会員の相原清次さんが彩流社から『千曲川古墳散歩』という全94頁カラーの豪華本を発売しました。神奈川、関東、東北と続く『古墳散歩』シリーズの続編で、いつもの相原さんらしく、序章のコメントが面白い。税別で二〇〇〇円。



自由原稿

## ロシアの無法と国連の無力

隆 恵

世界中で日常化している紛争は、イスラエル・パレスチナ紛争やイラク・シリアの内戦などほとんどが中東諸国でのものである。

ところが今年、東欧でのロシアの他国領土の侵略が公然と行われた。このロシアによるウクライナ侵略は、ウクライナ領のクリミヤの併合をいとも簡単に成し遂げ、更にウクライナ東部をウクライナから独立させるぞと脅しをかけて、国際的関心をこの東部の去就に持たせて、首尾よくクリミヤをロシア領にしてしまった。この手法はかつてのナチスドイツの再現であり、二十一世紀の今日の出来事とは思えない。弱小国のウクライナは、ロシアの餌食にされた訳で、正にロシアのプーチンは、ヒットラーやスターリンの再来の感がある。この無頼漢ぶりのお蔭で、マレーシア航空機の撃墜事件の真犯人の究明も棚上げとなり、既に風化してしまった。

このロシアの一連の侵略行為に対して、欧米諸国は数次に亘る経済制裁でロシアをけん制しているが、ロシアへの天然ガスの依存と輸出市場としてのロシアの魅力の前に、小出

し小手先の制裁に止まっており、現状は正にロシアのやり得に見える。この状況は、かつてのナチスドイツによるザール地方のドイツ併合を想起させ、その後のドイツの相次ぐ侵略に対して英仏米は独との正面からの対決を避けるために、弱小国を生贄として差出して、ヒットラーの暴走を止めようとするも、結局失敗に終わった悪夢を思い出させる。

今回のロシアの無法振りは、一八世紀〜二〇世紀の帝国主義の膨張政策と何ら変わらぬ、正に弱肉強食を地で行っている訳で、このロシアの無法な野蛮行為に対して、国連として具体的な行動はほとんどなかった。安保理は当初こそロシアを非難するが、ロシアが軍事介入すると強談判すると、ロシアの拒否権が明らかなので安保理は機能不全となってしまった。

核兵器と拒否権を持つこの五か国の常任理事国は、恥知らずを貫く蛮勇を持てば、他国の領土など好き放題にできるといふ事を、国連が認める結果となった。本来の国連は、過去の植民地主義や帝国主義の再発を防ぐことを使命としていた筈だが、第一次大戦後の国際連盟と同じで無力を露呈した。

この国連の欠陥を改善すべく、常任理事国の五か国以外の有力な国が国連の改革案を提

議しているが、常任理事国の妨害で暗礁に乗り上げている。元々の国連は、第二次大戦の戦勝国がオーナーとして発足させたものであり、この五か国に拒否権を付与させたのも、五か国のサロンだったからである。しかし、爾来七十年を経過する中で、戦勝国のサロンだった国連が、全世界の国が参加して国際紛争等の諸問題を解決する唯一の機関に変貌したため、当初の戦勝国のサロンのスキームとは全く異次元ものになってしまった。これまで五か国の拒否権により色んな不正義がまかり通ってきたが、今回のロシアの暴挙は絶対に看過してはならない。

安保理が機能しないのであれば、総会でこのロシアを非難して、全世界的な経済制裁を決議し実行すべきと思う。ここで、諸国のロシアへの個別事情に拘った安易な妥協は、絶対に避けなければならない。

ロシアに次ぐ安保理の理事国の破廉恥な無頼漢は中国であり、すでに尖閣諸島・南沙諸島・西沙諸島で相手国を震撼させている。

中国の膨張主義への対抗策は、遙か太平洋を隔てた米国の軍事的存在感であり、その米國も斜陽と言う現実を考えると、国連の改組により中国の暴走を食い止める手立てが急がれる。

十月講演予告

古代日本海沿岸の神々と

国宝『海部(あまべ)氏系図』

諸橋 奏

古代、日本民族は、列島を取巻く南・北からの海流により自然形成され、自然をカミとして崇拜してきていた。

ところが、紀元前四世紀頃から、舟を操りつ金属文化と水稲耕作文化をもった人々の集団が、大陸と朝鮮半島から次々に渡来し、現在の日本民族が形成された。この渡来人が生活文化の祖先神として祀ったのが現在の日本海沿岸地域の一宮の神々であり、これを一つの勢力に纏めたのが丹波国であった。

紆余曲折の末、四世紀頃には大和朝廷が成立、やがて「記紀」編纂となるが、その日本歴史はかなり牽強附会の産物といわれる。

偶昭和五十一年、千二百年余秘守されてきた丹後国一宮籠神社所蔵『海部氏系図』を海部光彦宮司が公に。日本史の実相は……？。

幹事からのお知らせ

お詫びと訂正

二三四号史遊会通信八ページの「顧問会議決定事項」の記事中、第2項で「年会費千二百円」は「年会費一万二千元」の誤りでした。お詫び申し上げ、訂正させて頂きます。

(幹事平山)

大阪城落城時に残された金銀価値

九月度の史遊会の講演で、瀧澤中さんが、大阪城で焼け残った黄金二万八〇六〇枚、銀二万四千枚余のことを紹介された。

解散後の「飲み会」では、早速、その経済的な価値について話題になった。

その時は、うる覚えと酔った状況での暗算で、百万石大名の一年分位の収入(米四十万石)に匹敵するだろうと答えた。

帰ってから、計算して見ると、当時の米価が割安であったこともあり、百万石大名の一年半の収入(米六十万石)に相当した。

計算根拠を示す。

慶長大判は四四・一匁(一六五グラム)で、

金純分六七・七%に、銀純分二七・七%(金純分に換算して二・三%)を加えると金七〇%に相当し、二万八〇六〇枚は金三・二トンになる。同様に、銀の大判は銀純分で七〇%(金純分に換算して五・八%)なので、二万四千枚余は金〇・四トン相当。すなわち、大阪城に焼け残った金銀の大判は全部で金三・六トンに相当する。現在の金相場なら百七十億円。

一方、慶長小判一両の金純分換算は一五・五グラムなので金三・六トンは約二十三万両となり、当時の米価でほぼ六十万石に相当する。現在の日本の米価なら三百億円。

当時、豊臣家の所領は六十五万石であったから、その税収の二年分になる。籠城する侍の賃金を年三十石程度と見ると、一年位なら二万人程度は雇えた勘定。

しかし、日光東照宮の造営費が五十七万両なので、その半額以下である。

ちなみに、身代金の記録では、リチャード王が十五万マルク(金三トン)、ルイ九世が五十万リーブル(金一トン)、フランソワ一世が四十デユカード(金一・二トン)。

日本では、生麦事件賠償金十萬ポンド(金〇・八トン)、下関砲撃賠償金三〇〇万ドル(金四・五トン)の例がある。

余白があつたので追記。

新井宏